

Title	中国新出簡牘学術調査報告 : 上海・武漢・長沙
Author(s)	中国出土文献研究会
Citation	中国研究集刊. 2012, 55, p. 129-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58669
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国新出簡牘学術調査報告

―上海·武漢·長沙-

中国出土文献研究会

、学術調査の概要

出簡牘資料の学術調査を行った。 究会は、中国上海、湖北省武漢、湖南省長沙において新究会は、中国上海、湖北省武漢、湖南省長沙において新二〇一二年八月二十七日~九月一日、中国出土文献研

催

な飛躍期に入っている。

中国では、一九九八年に郭店楚簡の全容が公開され、中国では、一九九八年に郭店楚簡の全容が公開する『上海中国では、一九九八年に郭店楚簡の全容が公開され、中国では、一九九八年に郭店楚簡の全容が公開され、

こうした状況を受け、本研究会では、二〇一二年七月

ユミ ^ t 。 初め、中国への学術調査旅行について次のような計画を

立案した。

八月二十七日 関空から上海へ、上海にて研究会開

後、上海から武漢へ。二十八日 午前、上海博物館にて上博楚簡閲覧。

午

三十日 午前、武漢から長沙へ。午後、岳麓書院に学簡帛研究中心にて研究会、座談会。 二十九日 午前、湖北省博物館見学。午後、武漢大

堆漢墓跡見学。午後、長沙簡牘博物館訪問。三十一日 午前、湖南省文物考古研究所訪問、馬王

て岳麓秦簡閲覧。

九月一日長沙から上海経由で帰国。

寺大学非常勤講師)、 学非常勤講師)、 二 (同)、 参加 パメンバ 福田 1 也 は、 白雨田 (大阪大学教務補佐員、 福田哲之(島根大学教授)、 草野友子 (大阪大学教務補佐員、 (日本学術振興会特別研 大阪教育大 四天王 竹田 健



参加メンバー (馬王堆漢墓跡にて)

日、以下の上博楚簡の閲覧申請について許可の通知が届 が筆者(湯浅邦弘[大阪大学教授])の計七名である。 に対して、訪問と上博楚簡閲覧の申請を行った。折り返 に対して、訪問と上博楚簡閲覧の申請を行った。折り返 に対して、訪問と上博楚簡閲覧の申請を行った。折り返 し、上海博物館から受諾の連絡があり、それを受けて、 近、上海博物館から受諾の連絡があり、それを受けて、 が筆者(湯浅邦弘[大阪大学教授])の計七名である。 と、上海博物館 しつつ、博物館側との折衝を続けた。その結果、八月六 と、上海博物館 しつつ、博物館側との折衝を続けた。その結果、八月六 と、上海博物館 に対して、訪問と上博整簡の閲覧申請について許可の通知が届 と、上海博物館 に対して、訪問と上博整簡の閲覧申請について許可の通知が届 と、上海博物館 に対して、訪問と上博整簡の閲覧申請について許可の通知が届 と、上海博物館 に対して、訪問と上博整節の閲覧申請について許可の通知が届 と、上海博物館の表示を受けて、 の言見を集約 に対して、訪問と上博整節の閲覧申請について許可の通知が届 と、上海博物館 に対して、訪問と上博整節の関覧の申請を行った。折り返 に対して、訪問と上博整節の関覧申請について許可の通知が届 しつつ、博物館側との折衝を続けた。その結果、八月六 と、上海博物館 しつつ、博物館側との折衝を続けた。その結果、八月六 と、上海博物館 と、上海博物館 しつつ、博物館のより、この計である。 に対して、おより、この計である。 に対して、おより、この計である。 に対して、おより、この計である。 に対して、おより、この計で、 に対して、おより、この計で、 に対して、 に対し、 に対し、 に対して に

座談会の開催許可を得た。さらに、陳偉教授から、 陳偉教授に我々の渡航目的と日程を連絡し、 帛研究中心に留学中の草野友子である。 の交渉を進めた。その仲介役となったのは、 これと並行して、武漢、 第八分冊所収)。 同第七分冊所収)、『成王既邦』、『李頌』、 収)、『凡物流形』甲本・乙本、『武王踐阼』 「弟子問」(『上海博物館蔵戦国楚竹書』 命』、『王居』、『志書乃言』、『有皇将起』(以上、 長沙の訪問につい 草野は武漢大の 第五 訪問および 武漢大学簡 ても現地と 『蘭賦 **分冊所** 以上、

研究所の張春龍教授に連絡を取っていただき、これによ

湖南大学岳麓書院の陳松長教授および湖南省文物考古

り、長沙での旅程もほぼ確定した。

楚簡 された劃痕と竹簡の配列」について、 簡『成王既邦』」について、竹田健二が「竹簡背面に記 て研究会を行った。発表者は三名。 野と合流し、宿泊先の上海新協通国際大酒店の会議室に 関西空港に集合し、 て、夜八時から十時まで、 こうして八月二十七日、 『有皇将起』 と『鶴鷅』 午後便で上海に到着した。そこで草 武漢在住の草野を除く六名が 翌日以降の打ち合わせを兼ね の形制」について、それぞ 金城未来が 福田一也が「上博 「上博楚

した。

れ発表した。

入れられた。ここで驚いたのは、 学した。ちなみに筆者は、印章、書法、 間二十分。その後、 については本稿第二章参照)。閲覧と会談の時間は とができた(上博楚簡実見および葛亮氏との会談の詳細 テーブルの上に置かれ、 られたが、先に申請していた通りの上博楚簡が次々に ととなったのである。そうした訳で、若干の緊張を強い を制作中とのことで、 いたことである。博物館では、開館六十周年の記念映像 研究員の出迎えを受け、 翌二十八日の九時四十分、 メンバーは散会して、 我々の訪問の様子が収録されるこ 充分に時間をかけて閲覧するこ 直ちに地下二階の特別室に招き 上海博物館に到着し、 撮影クルーが待機して 青銅器の各室を 博物館内を見 葛亮

約一時間かけて見学した。

は、夕食をとり、武漢大学付近の易斯特国際酒店に宿泊い、そこから武漢に飛んだ。武漢着は午後六時。その日昼過ぎ、上海博物館を後にして、上海浦東空港に向か

を行い、草野が上博楚簡『命』について発表した。だけることとなり、午後二時から三時二十分まで研究会中心のご好意により、我々のために会議室を貸していた物館を見学し、昼食後、武漢大学に向かった。簡帛研究三日目となる八月二十九日は、まず午前中に湖北省博三日目となる八月二十九日は、まず午前中に湖北省博

活発な質疑応答が約二時間にわたって行われた。出張のため不在であるとの連絡を事前に受けていた)。授、劉国勝教授、宋華強副教授の三名(陳偉教授は長期会談が始まった。同席していただいたのは、李天虹教会談が始まった。同席していただいたのは、李天虹教会談が始まった。同席していただいたのは、李天虹教

(その詳細については第二章および第三章参照)。 簡背面に見られる「劃痕」「墨線」に関する情報である 包山楚簡、北京大学竹簡、上博楚簡、厳倉楚簡などの竹 倉整簡の整理状況、その他の新出資料の情報、そして、 をして、 のでは、前島研究中心で進められている は、おに注目されたのは、簡帛研究中心で進められている

四日目の八月三十日は、午前中に、武漢から長沙へ高

は岳麓書院に直接乗り入れることができず、 で岳麓書院に向かった。 泊先の瀟 速鉄道で移動した。 キロ離れた駐車場で、 湘華天大酒店でチェックインを済ませた後、 所要時間 専用のシャトルバスに乗り換え 今年からの新制度で、 は約一時間半。 書院から約 昼食後、 民間 0) 車 車 宿

ることとなった。

受け、まずは書院内を見学した。ここで注目されたの 室に招き入れられ、 タッチパネル式のモニターなども備えて紹介するもので の博物館で、中国の書院文化を、 である。これは、二〇一二年七月にオープンしたば 正門を入って左手の所に新設された中国書院博物館 東の午後三時に書院に到着。 陳教授と会談した(その詳細については第四章参 一時間ほどの見学を終えた後、 そこで、岳麓秦簡計三十簡を実見 陳松長教授 様々な資料に加 博物館二階の一 0 出迎えを かり え

た。

耶秦簡と三国呉簡を実見することができた。竹簡はガラ収蔵している部屋の隣室に招き入れられ、希望通りに里秦簡と郴州蘇仙橋三国呉簡を要請した。その後、簡牘を持、実見を希望する簡牘を尋ねられたので、我々は里耶古研究所に向かった。そこで張春龍教授の出迎えを受击終日となる八月三十一日は、朝九時に湖南省文物考

秦簡 スケースの中に並べられており、 (その詳細については第五章参照)。 が九 簡、 奥側に三国呉簡が十一 部 屋の 簡並べられ 入り \Box 側 てい 13 里 た 丽

る湖 る。大規模な墓坑を見学して、 術的意義を改めて痛感した。なお、 三号墓坑をそのまま屋根で覆って展示している施設 た。ここは現在、 南省博物館は現在改修中のため見学はできなか 時間ほどの訪問を終え、 湖南省博物館の管理下にあり、 次に馬王堆漢墓跡 特に馬王堆漢墓帛書の学 出土品を展示してい に 馬王堆 向 か 0

示、 に建つ平和堂デパートの五階の一角が「平和堂出 その施設 展・三国呉簡陳列室」となっていたが、 訪問した際には、 同日の午後二時半であった。二〇〇六年に我々が長沙を 最後の訪問先となる長沙簡牘博物館に到着 研究されている。 はなく、 走馬楼三国呉簡十余万枚が出 関係資料はこの長沙簡牘博物館 現在、 したのは 平和堂に 土した上 1土文物

心に、出土文物を、年代別・種類別に展示する現代的な二〇〇三年に走馬楼の古井戸から出土した西漢簡牘を中属している。一九九六年に発見された走馬楼三国呉簡、十一月のオープン。国家二級博物館で、長沙市文物局にこの博物館は市内中心部の白沙路にあり、二〇〇七年

披露された。収蔵文物は約三千五百点にのぼるという。 器などの展示があり、青銅器の編鐘の演奏実演も特別に は、「長沙出土文物精華展」として、青銅器・陶器 載体」「中国簡牘書法」などのコーナーからなり、二階 施設である。一階は「三国呉簡」「中国簡牘」「世界文字 その後、簡牘の整理室に案内され、三国呉簡整理保護 ·· 漆

る。 は全体で約一万枚余。内、有字簡が二千枚程度、 キャナを使った西漢簡牘の画像の整理である。西漢簡牘 て行われており、特に注目されたのは、赤外線カラース 分析によって、おおむね武帝期のものと推定されてい (干支の記された簡牘) が約二十枚含まれており、その (文字の記載されてい ない 簡) が八千枚程度。紀年簡 白簡

前記の三国呉簡と西漢簡牘の整理が五名の研究員によっ 項目の責任者である宋少華教授と対面した。ここでは、

11

得ることができた(その詳細については第三章参照)。 質疑応答に入り、 た。スキャナに接続されたパソコンでその様子を拝見し を毎日五 ソン製の赤外線カラースキャナを使って、脱水前の簡牘 この整理室では、二〇一二年に購入したばかりのエプ 画像は極めて鮮明であった。その後、宋教授との ~十本ずつスキャンしているとのことであっ 簡 牘 の形制などについて貴重な情報を

> 我々の熱意を、どの博物館・大学でも温かく受け止めて また、領土問題をめぐって近隣諸国との緊張関係が高 なるのではないかと心配された。しかし、台風は推定進 本土に向かいつつあるとの情報があり、予定便が欠航に まっている時期でもあったが、学術調査を目的とする 路をそれ、上海にはほぼ定刻に到着することができた。 出発日に、史上最大級という台風十五号が沖縄から中国 今回の渡航については、若干の不安もあった。まずは ただき、極めて丁重な対応をしていただいた。 こうして全日程を無事終えることができたが、実は、

また、会談に応じていただいた関係各位に心より御礼を ど、多種大量の簡牘を閲覧できたことはない。これまで 申し上げたい。 感を得た。貴重な出土簡牘の閲覧を許可していただき、 継続してきた学術交流が大きく実を結びつつあるとの実 中国各地の出土文物を実見調査してきているが、今回ほ 我々研究会は、二〇〇五年から毎年、中国に渡航し、

湯浅邦弘

二〇一二年八月二十八日、我々一行は上海博物館を訪

簡)の一部を実見した。問し、収蔵されている戦国時代の楚簡(以下、上博楚

れた。ケースの中には、それぞれ十枚程度の竹簡が、白か?)でできたケースを数個ずつ、順次入れ替えて行わの下、竹簡の入ったガラス板(或いは厚いアクリル板実見は、博物館の専門研究員である葛亮氏の立ち会い



上海博物館における実見の様子。 左手前の背中の人物が葛亮氏。

ずれてしまい、文字を見ることができないこともある。 が、 る。 今回実見した中では 簡背面の文字のある部分と台紙の切り取られた部分とが 竹簡が台紙に固く固定されているわけではないため、 の文字が見えるようになっているのである。もっとも、 裏側から、 台紙が文字のある部分だけ切り取られている。 台紙があるために、竹簡の背面は見ることができない 蔵戦国楚竹書』によって公表された時点のものである。 1 台紙の上に緩やかに固定された状態で並べら ケースの中の竹簡の配列は、基本的に『上海博物館 竹簡の背面に篇題など文字が記されている場合は、 台紙の切り取られた部分を通して、竹簡背面 『命』の篇題がそうだった。 ケースの ħ 7

の最初の整理者は李零氏であり、その李氏による最初の

である。 たのだが、後に整理者が交替して変更された、とのこと段階の整理では、この文献の篇題は「陰陽」とされてい

がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。 がない。また、その写真も公表されていない。

的な釈文においてそうした情報がまったく無視されてい的な釈文においてそうした情報がまったく無視されてい博物館が上博楚簡を入手した一九九四年から今日まで、すでに二十年近く経過していることを思うと、整理者のすでに二十年近く経過していることを思うと、整理者のすでに二十年近く経過していることを思うと、整理者のすでに二十年近く経過していたとのことである。上海初は李零氏が整理を担当していたとのことである。上海初は李零氏が整理を担当していたとのことである。上海初は李零氏が整理を担当していたとのことである。上海初は李零氏が整理を担当していたと思うと、

うに思われた。るのは、整理全体として見た場合にやはり問題があるよ

学が収蔵した漢簡の背面にあるものを孫沛陽氏が発見しひっかき傷状の斜線のことである。二○○九年に北京大に関する情報である。劃痕とは、竹簡の背面に記されたに関する「無である。劃痕とは、竹簡の背面の劃痕



上海博物館における実見の様子

たことをきっかけに、 して注目されている。 竹簡の配列を復元する手掛かりと

Ġ

簡

題 これに当たる されている場合もある。 なお、竹簡の背面には、 (第十一簡背面) の上部にある右下がりの斜線などが 上博楚簡の中では、 墨筆による斜線 (墨線) 命 の篇 が記

あり、 かし、 された。 踏まえると、 大学の戦国簡や北京大学の漢簡の劃痕についての分析を る。上博楚簡の篇題のあるほとんどの竹簡においては、 劃痕が竹簡の配列を復原する決め手になると思った。 これに対して葛氏は、「劃痕の存在が分かった当初は、 説」〔『文物』二〇一一年第六期所収〕など)を踏まえ あるかもしれないが、 篇題の上、或いは下に、 (北京大学出土文献研究所「北京大学蔵西漢竹書概 葛氏に劃痕に関する情報を教えて欲しいと求めた。 現在 博楚簡の背面にも劃痕の存在するものがあるとの情 劃痕には連続したものもあれば、 反対方向 は劃痕の情況は非常に複雑であると考えてい 上 |博楚簡の篇題のある竹簡には長い劃痕が のものもあれば、 詳しいことは分からない」と回答 劃痕や墨線が認められる。 間隔のあるものもあ 断裂したものも

前述の通り、 現在上博楚簡は、 台紙ごとケースに収め

> 博物館や整理者の多くが、竹簡の背面に関して十分には うに、『凡物流形』乙本第一簡の背面に「陰陽」と記さ 注意を払ってこなかったことを示すと思われる。 れていたことが従来公表されていなかったことも、 面との両面に文字がある竹簡だけである。 認することができるものは、 であるから、 すべての竹簡の背面の写真を撮影したわけではないそう はできない。 ń の背面の情況を確認することや、写真を撮影すること ている。 現在上博楚簡の竹簡でその背面の情況を確 上海博物館が戦国楚簡を入手した時点で、 葛氏によると、 今直ちにケースを開けて竹 基本的には竹簡の正面と背 先に述べたよ

Ļ になることを心配している、と発言され 線写真や赤外線スキャナーによる撮影も行いたい、 は、改めて竹簡の現状の写真をすべて撮影したい、 竹書』に関する当初の出版計画がすべて完了した後に 葛氏はそのことを認めた上で、『上海博物館蔵戦 赤外線スキャナーは発熱がひどく、処理の際に高温 た。 国 . 禁

た竹簡はない、 うした竹簡があるかと質問したところ、 されているものがあることに関連して、 第三に、清華簡の背面に、 と否定された。 竹簡の番号を示す数字が記 葛氏は、そうし 上博楚簡にもそ

上博楚簡の中には、 竹簡正面の右下に小さく 実見後の記念撮影。前列右から二人目が葛亮氏。

導入することも進みつつある。 出現し、 赤外線スキャナーといった新たな機器を整理作業に 出土文献に関する研究は大いに進展した。

ま

体的にまとめて整理することである、との認識を示され 自らの次の段階の仕事として、これまでの研究成果を全 に上博楚簡の処理を担った世代ではない。その葛氏 直す作業が必要であると痛感した。葛氏は、約二十年前 れまでの研究の蓄積を踏まえて上博楚簡全体を改めて見 開されることを期待したいが、その次の段階として、こ 上博楚簡については、何よりもまずその全容が早く公

開されてきた。

しかし、

上海博物館がこの戦国楚簡を入 整理作業の進展とともに順次公

新たな出土資料も相次いで

これまで上博楚簡は、

は第九分冊に収録される予定であるとのことであった。 そうである。それは占卜関係の文献の竹簡で、その文献 「一二三四…」と順番に数字が記されているものがある

手してから今日までの間に、

可能性があるとのことである。 いは三冊刊行され、その最後の一冊には断簡が含まれる る『上海博物館蔵戦国楚竹書』は、今後さらに二冊、 なお、葛氏によれば、 残簡も含めてすべて公開されることを強く希望した 現在第八分冊まで刊行されてい 上博楚簡ができるだけ早 或

た第四回 筆者は、二〇一二年年五月二十五日に東京で開催され の文献的性格」と題する発表を行い、 日中学者中国古代史論壇において 上 会議論文 |博楚簡

最後に、

本稿の

目的からは逸脱するのであるが、

李

に関連して述べておきたいことがある。

ていた。

分の先端に、複数の黒い部分が存在することである。り、第一簡上半部の断裂箇所の鋸歯状に突き出ている部り、第一簡上半部の断裂箇所の鋸歯状に突き出ている部の根拠は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』の写真を見る限の根拠は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』の写真を見る限の根拠は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』の写真を見る限の根拠は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』のを選出に原稿を発表した。その中で筆者は、『李頌』の整理集に原稿を発表した。その中で筆者は、『李頌』の整理

至ったため、撤回する。後、右の筆者の指摘は根拠が不十分であると判断するに跡である可能性が高いと推測したのであるが、発表の跡である可能性が高いと推測したのであるが、発表の業者は写真に見えるその黒い部分は何らかの文字の痕

(竹田健二)真とが異なるように見えた理由については不明である。ような黒い部分はほとんど認められなかった。実物と写ろ、第一簡上半部の断裂箇所に、文字の痕跡と見られる今回の実見で『李頌』第一簡を子細に観察したとこ

武漢大学簡帛研究中心・長沙簡牘博物館

談会を行った。 訪問し、李天虹教授・劉国勝教授・宋華強副教授との座八月二十九日、我々一行は、武漢大学簡帛研究中心を



武漢大学簡帛研究中心の会議室にて

究課題があるため、 これらとは別に、個人として取り組むプロジェクトや研 担当する。三つのプロジェクトは、 もので、 代までの漢字や少数民族の文字をすべてデジタル化する 字庫」プロジェクトである。これは、 夏丁家咀 種類の楚簡 天虹教授を中心とする、 心が団体として参加するものであり、 ト関係) 簡帛研究中心は主に秦代の簡牘の文字について の整理である。 ・荊門厳倉から出土したもの。 (江陵藤店・老河口市安崗・ 皆とても忙しい、とのことであっ 第三に、新聞出版総署の 湖北省から出土した未公開 いずれも簡帛研究中 それぞれの教員は 中国の古代から清 内容は 江陵磚瓦廠 遣策と占 一中華 の五

土した器物はない。 年末の予定である。厳倉楚簡はすべて残簡で、完簡はな 影を行っている。 基づいて釈文の修正を進めるとともに、 を現場で撮影し、簡単な釈文を作成した。現在は写真に 土した厳倉楚簡については、 渉状況について質問した。李教授は、「二○一○年に出 続けて、 簡長は六十~七十四、 復元はほぼ不可能である。 李教授を中心としている厳倉楚簡の整理 整理作業の終了時期はは二〇一三年の 厳倉楚簡は墓主が確定されており、 盗掘を受けているため他に出 出土した時点で竹簡 全体の文字量は二百字程 赤外線写真の撮 の写真 の進

も記載がある。墓主が判明することは珍しい」と回答さ墓主は「悼滑」である、この人物については伝世文献に

れた。

では文字を読み取ることができないが、赤外線ではよくは至っていない。七〇年代に出土した藤店の竹簡は肉眼る。それらについて考古的調査は行っているが、出版にが出土した。湖北省では他にも未発表の出土資料があ問したところ、「最近荊州から数枚の楚簡(内容は文書)また、中国各地では近年も出土が続いているのかと質また、中国各地では近年も出土が続いているのかと質

に対する李教授の回答は、以下の通りである。
さらに我々は、劃痕に関して意見をうかがった。これ見えた」との回答があった。

た。

に再度調査し、竹簡の背面を赤外線で写真撮影した結 がある。或る劃痕は竹簡の配列を示す手がかりになるよ がある。或る劃痕は竹簡の配列を示す手がかりになるよ がある。或る劃痕は竹簡の配列を示す手がかりになるよ がある。或る劃痕は竹簡の配列を示す手がかりになるよ がある。或る劃痕は竹簡の配列を示す手がかりになるよ がある。或る劃痕は竹簡の配列を示す手がかりになるよ とができず、さほど注目してはいなかった。厳倉楚 とができず、さほど注目してはいなかった。 とができず、さほど注目してはいなかった。

厳倉楚簡は残欠が激しく、竹簡の配列を復元することは果、劃痕のあるものが十~二十枚確認できた。しかし、

困難である

輯所収、 冊背劃線初探」を指す。『出土文献与古文字研究』 表の資料に基づくものであるが、 る。北大簡の劃痕については、 会議で、 告をした際、その文章の中で劃痕に触れた た。その後二〇一一年に清華大で竹簡の形制に関する報 性に改めて気付いて、 学も竹簡背面の竹簡番号(ノンブルに当たるもの) の発表に対する反応はかなり良かった。この清華大での 際学術研討会」を指す。二〇一一年六月二十九日)。そ 土文献与保護中心主催の に注目しており、劃痕には注目していなかったようだ。 湖北 二〇一〇年に (李)は竹簡背面の写真を見て、竹簡背面の線の重要 竹簡背面の写真がすべて公開された。当初は清華大 土楚簡 多くの人が劃痕の問題に興味を持ったようであ 二〇一一年十二月)。 (総第一二一期)、二〇一一年十二月)を発 (五種) 『清華大学蔵戦国竹簡 簡帛網に小さなニュースを発表し 格式初析」(『江漢考古』二〇一 「清華大学蔵戦国竹簡 私も劃線についての論文 その後孫沛陽氏が、 論文を発表した (一)』が刊行さ (清華大学出 (壹 第四 () 簡 未発 玉

> てくるのではないか。現在は、急いで結論を出すべきで うから、 る竹簡背面の写真はすべて公開されるようになるであろ かについては、疑問を感じている。今後劃痕と関連の ないと考えている。 痕についてまだはっきりしたことを確定することはでき 配列の復元に役立つという見方が主流であるが、 痕について学界では、 岳 竹簡の編連と直接的な関連を持つものであるかどう 麓書院蔵の秦簡 将来、十分な資料に基づいて、自然に結論 劃痕が参考になることは間違い の背面にも劃 劃痕は編連のためであり、 「痕はあり、こうした劃 私は劃 ない あ

も無いと指摘した。
も無いと指摘した。
も無いと指摘した。
かという点についてであるとし、包山楚簡のにいたのかという点についてであるとし、包山楚簡のを残したのかという点についてであり、第二に誰が劃痕管の編連との先後関係についてであり、第二に誰が劃痕を残したのかという点に関する問題は、まず第一に竹

要である、 う点が問題である、 評価することはできない、自分は北大漢簡を見たことが 報であると思うが、この問 宋副教授も、 劃痕による竹簡の配列 劃痕の作者は誰か、 劃痕は文献 題 の解明には更なる資料が必 0 形 ?の復元について過大に その目的は何 成に関わる重 一要な情 かと

はないと考える。



武漢大学簡帛研究中心のある建物の前にて

簡牘の撮影や釈文作成においても劃痕に注目している

あるが、 た。 **憤博物館において、** 面の劃痕との対応が良くないことがある、と述べられ の編連を文字を根拠として行った場合、 なお、この二日後の八月三十一日、 劃痕のあるものもあり、ないものもある、 赤外線スキャンした画像の処理をパ 我々一行は長沙簡 正面の文字と背 竹簡

華教授である。我々は宋教授にも劃痕に関する質問をし ソコンで行っている作業や釈文作成作業の見学を行っ 宋教授に対する質問は、 この時我々に対応してくださったのは元館長の宋少 回答を得たので、 紹介しておく。 長沙簡牘博物館が行っている

長沙簡牘博物館の整理室にて。左から三人目が宋少華教授。

以下の通りである。か、、というものであった。これに対する宋教授の回答はか、というものであった。これに対する宋教授の回答は

その竹簡の背面に線を記した後、次いで書写を行い、 れた行政文書の木牘数枚の背面に、 が所蔵する三国呉簡と漢簡とには見られないが、 原することができる。 に線がある場合があり、 ので傷つけられていた。 簡の場合は、 の場合は竹簡背面に線が記されているが、この後漢の竹 状況から、 後漢の竹簡の背面に劃痕があることを確認した。 いて竹簡の編聯を行った、と考えている。 ても注意して観察しており、 すでに我々は簡牘 まず書写が行われていない竹簡を配列して、 竹簡背面の表面がナイフなどの何か堅い の背面にある文字以外の情報 そうした現象は、 なお、木牘についてもその背面 劃痕に基づいてそれの配列を復 昨年考古研究所が発掘した 劃 痕がクロ 長沙簡牘博物館 但し、清華簡 スして記 is つい

『清華大学蔵戦国竹簡(一)』に竹簡背面の写真が収録さて劃痕が発見されたことや、二〇一〇年に刊行されたができた。二〇〇九年に北京大学が入手した漢簡においに関する研究の情況について、大いに理解を深めること研究中心や長沙簡牘博物館での調査により、我々は劃痕研究で述べた上海博物館に加えて、この武漢大学簡帛

れるに至っていないように思われ た基礎的な点を含めて、 る。このため、 資料は、 る通り、 が進み始めているのである。もっとも、 究者の間で劃痕に対する関心が急速に高まり、 れたことなどを契機として、 北京大学の漢簡をはじめ、 ほとんどがまだ公開されていないのが実情であ 劃痕とはそもそも如何なるものかとい 研究者の間で認識が十分共有さ 出土文献 る。 劃痕に関する重要な 0 李教授が指摘 研究に携 その がわる研)研究

う。

成文において大いに注目される研究課題の一つといえよば、どの程度有効なのか。こうした点は、今後出土文献は、どの程度有効なのか。有効であるとするならる手掛かりとして有効なのか。有効であるとするなら

(竹田健二)

四、岳麓秦簡

されているものを見たことがあ

左端) ば かれ、 迎えを受けた。はじめに書院内の各施設とオープンした はかりの 八月三十日午後、 と会談した。 約 中国書院博物館を見学し、 時間、 岳麓秦簡を閲覧しつつ、陳教授 岳麓書院に向 かい、 その後、 陳松長教授 特別室に招 の出



麓書院における竹簡の実見と会談

段階の整理番号で、分類後のものではないからとのこと されていた。番号は連番ではなかったが、これは、 で保存してあり、上部にはそれぞれ五桁の整理番号が付 つ、それぞれ脱水済みの竹簡一枚ずつをガラス板で挟ん 竹簡 の保存状況であるが、 専用箱に十五本ず 初期

木簡が二本含まれていた。脱水後の竹簡の状態は概ね良 も確認できるため、非常によい保存方法であると思われ 袋をつけて一本ずつ手に取ることを許された。 である。 から出された竹簡がテーブルの上に並べられ、 これを二セット、 計三十本実見した。 竹簡背面 白手

> 好で、 の竹簡が一番よく見えるとのことである。 赤外線スキャンしたものもあるが、 字跡も鮮明に見える。写真は、脱水処理 字跡は、 脱水後 前

あった。そこで、岳麓秦簡の基礎的情報を確認しておき 録を予定している法律関係文書および数書とのことで 内容は、未公開の簡牘で、主として第三分冊以降に収

簡と、収蔵家が寄贈した竹簡は、形制や書体・内容など もので、大小八箱に入っていた竹簡はラップで包まれて が非常に類似しており、 簡の総数は二一七六簡となった。岳麓書院が購入した竹 十余枚)が岳麓書院に寄贈された。これにより、岳麓奏 蔵家が購得していた竹簡七十六枚(ほぼ完整なものは三 ○○余枚)とされる。また、二○○八年八月、 いた。その総数は、二一〇〇枚(ほぼ完整なものは 香港に流出していた秦簡 岳麓秦簡は、二〇〇七年十二月、湖南大学岳麓書院が 同一 (出土地不明) の出土簡であろうと考えら を緊急購 香港

八 mm 。 がある。 編綫は二種で、三道編綫のものと、 ②二十七四前後、 編綫痕と文字との関係から、 ③ 二 + 五 cm 前後。 ①筆写した後に 両道編綫 は

前 る。

れている。

大半は、

竹簡であるが、三十余枚の木簡もあ

簡長は、

①三十

竹簡の形制は三種に大別される。

0)

別される。 編輟したもの、 ②先に編輟してから筆写したもの、 に大

れる。よって、成書年代の下限は、始皇帝三十五 十七年」、「三十四年」、「三十五年」という紀年が認めら 二)年頃と推測される。 筆写時期については、『質日』(暦譜)に、「秦始皇二 (前二

れている。 ても、治獄にたずさわった人物であった可能性が指摘さ 引き書が含まれていることから、岳麓秦簡の墓主につい 雲夢睡虎地秦簡と類似した秦の律令や役人の ための手

基礎整理の結果、 岳麓秦簡は次の七部に大別された。

- 『質日』
- 『為吏治官及黔首
- 『占夢書』
- 数 書
- 四
- Ŧ. 「奏讞書」
- 『秦律雑抄

七

『秦令雑抄

背面に篇題があり、 このうち、『質日』『為吏治官及黔首』『数』書は竹簡 その他は編者による仮題である。

五.

書院蔵秦簡〔壹〕』(上海辞書出版社) すでに二○一○年十二月、 朱漢民·陳松長主編 が刊行され、 「缶麓 岳麓

> 秦簡 れた。また、二〇一一年十一月には、 献に関する図版(カラー・赤外線図版)・釈文が公開さ の内、『質日』『為吏治官及黔首』『占夢書』の三文 同第二分冊が刊行

され、『数』書が掲載された。

確認できた。 録予定の未公開簡牘であった。至近距離で閲覧できたの 我々が閲覧したのは、これらに続く第三分冊以降に収 第一分冊の説明にもあった、 いわゆる秦隷の字体も

教授は、実は、第一分冊刊行の時点では、そのことにま た。北京大学竹簡、上博楚簡などでは、 は二〇一三年の前半に刊行を予定しており、全体では、 していくという。なお、『岳麓書院蔵秦簡』 ので、今後は、背面の情報にも充分に留意しながら刊行 写真も撮影済みであり、背面の写真もすべて撮っている に気づいたとのことであった。岳麓書院では、脱水前 だ充分な認識がなく、第二分冊の編集段階でその重要件 れているが、岳麓秦簡ではどうなのか。これについ 痕」「墨線」が竹簡配列の有力な手がかりとして注目さ 一一六分冊になるとのことであった。 次に、質疑応答に移り、まず「劃痕」につい 竹簡背面 の第三分冊 て質問 0 , て陳

売いて、筆音(景桟)は、兵竜巻角)コで党用筆子がの連接を決定することはできない、との回答を得た。も竹簡配列の参考とすべきものであり、劃痕だけで竹簡すべて劃痕であるとは限らない、また、劃痕はあくまで

で、特にこれを取り上げて質問した。見られる特異な文献として『占夢書』に注目しているの続いて、筆者(湯浅)は、岳麓秦簡の中で段組筆写が

う。

なる。

「古夢書」は、竹簡四十八枚。簡長約三十四。三道編『古夢書』は、竹簡四十八枚。簡長約三十四。三道編『古夢書』は、竹簡四十八枚。簡長約三十四。三道編

について質問し、それぞれ以下のような回答を得た。評価している。ただ、若干の疑問もあるので、次の四点の『占夢書』を、現時点では最古の占夢書文献であると陳松長教授は、『岳麓書院蔵奏簡〔壹〕』において、こ

『占夢書』は文脈をとりづらい部分もあるが、竹簡

②分段筆写していない竹簡五枚を先に配列し、二段組本『解夢書』が天地人の配列になっていることを参考にて配列を決めたのか。→劃痕は認められなかった。敦煌背面に劃痕は認められたのか。またそれを手がかりとし

で筆写している竹簡を後に配列しているが、これが逆転

の文書の慣例からすると、序である可能性が高いだろし、後に置くと結論(総括)ということになるが、中国ていない五本の竹簡を先に置けば、序(概説)に相当する可能性はないか。→その可能性もある。分段筆写し

定できない部分が残る。
③二段組の竹簡は、まず上段を右から左に読み、下段に移たいところがある。ただ、上段を先に読み、下段に移たいところがある。ただ、上段を先に読み、下段に移るというように読んでも、問題があるところがある。確るというように読んでも、問題があるところがある。確るというように読んでも、出題があるところがある。

④二段組みの竹簡部分の配列は天地人の分類に基づく のことであるが、天地人の分類・配列があったかどう がる。秦簡の段階でもすでに明確な天地人の分類・配列を原則とする敦煌本『解夢書』などを参考に配列した あったと考えても良いか。→今回は、天地人の分類・配列が あったと考えても良いか。→今回は、天地人の分類・配列が あったと考えても良いか。→今回は、天地人の分類・配列が あったと考えても良いか。→今回は、天地人の分類・配列が あったと考えても良いか。→今回は、天地人の分類・配列が あったと考えても良いか。→今回は、天地人の分類・配列が もので、秦の時代に明確な天地人の配列があったかどう もので、秦の時代に明確な天地人の配列があったかどう

陳松長教授のご苦労は相当なものであったと推測さ分も残るようであるが、竹簡の整理・釈読に当たられたこのように、『占夢書』については、なお未確定な部

され、 より精度の高い釈文が提供されるであろうと感じ 背面の情報にも留意しつつ、竹簡の配列が検討

五 湖南省文物考古研究所

拝見させていただくことができた。 幸い同研究所が保管する郴州蘇仙橋三国呉簡もあわせて 秦簡の実見と学術情報の収集が主たる目的であったが、 里耶秦簡の正式報告書の第一分冊にあたる『里耶秦簡 慈利楚簡を実見させていただいて以来六年ぶりであった るのは、二〇〇六年九月に戦国楚簡研究会 国湖南省長沙学術調査で同研究所を訪問し、里耶秦簡と 〔壹〕』(二〇一二年一月) |中国湖南省長沙学術調査報告」参照)。今回の訪問は、 〔『中国研究集刊』第四十一号〈二〇〇六年十二月〉 まず里耶秦簡から報告する。実見したのは九点で、 八月三十一日午前九時、 張春龍先生の出迎えを受けた。張先生にお目にかか の刊行をうけて、新たな里耶 湖南省文物考古研究所に到着 (当時) 所収 の中

号と形態は以下の通りである。

(裏面) (表面

7 66 検 木簡

7 96 木簡

8 62 木牘 (表面)

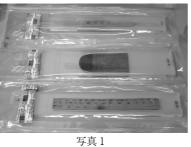
先生は次のように説明してくださった。 記されていた(写真1)。こうした保存方法について張 なかに入れられ、 これらはいずれもガラス板に挟んだ状態で透明な袋の ガラス板の下部中央に手書きで編号が

らない。奈良文化財研究所と交流があり、 色に変わる。そうなると窒素を入れ直さなければな ことを防ぐためにガラス板で挟み、透明な袋の中に 並べてある閲覧用の簡牘は湿気を吸収して変形する は優れていて、収縮や変形は生じていない。ここに 里耶秦簡は出土後、脱水処理を施したが、脱水技術 は三菱のものを使っている。 い錠剤は、窒素が袋から抜けて空気が入り込むと青 入れて窒素ガスを充填している。袋の上部にある赤

号が付されており、 あると付け加えられたが、帰国後にあらためて照合した れたもので最終的な報告書と一部合致していないものも ス板に手書きされた編号について、これは最初に記入さ 七層出土簡牘は第三輯に収録予定)。なお張先生はガラ ことであった(『里耶秦簡〔壹〕』の「凡例」によれば第 表済み、7の番号をもつ第七層出土の五簡は未公表との 8の番号をもつ第八層出土の四簡はすでに の7や8の数字は古井戸から出土した際の層位を示し、 ることが確認された。 〔壹〕』(文物出版社、二〇一二年一月)に収録されて公 また各簡に付された編号は出土時の整理番号で、 8-15の簡は『里耶秦簡〔壹〕』では8-19の編 張先生が言われた編号調整の例であ 『里耶秦簡 最初

木牘が中心であったが、 の実見は二回目であり、 おむね文章が短く、 痕・墨線については、 7-96など多様な木簡が展示されており、未公表の資料 先に述べたように湖南省文物考古研究所での里耶秦簡 さらに近年その存在が注目されている簡牘背面の そうした線は確認されていないとのことであった。 8-284 や検 一枚の木牘が一件の文書であるた 里耶秦簡の大部分は行政文書でお (郵行文書) 前回は表裏に書写された公文書 今回は同種の木牘とともに楊 7 66 券書7-41

> には切り離さず、年月日・担当者・お金・食料の数など これら各種の木簡について張先生は、例えば「屋根型の も含めて、選定にかかわるご配慮をありがたく感じた。 理解を深めることができた。 話がおよび、木簡ならではの多様な形態と機能について と木簡に見立てた紙を使って懇切に説明してくださった の記録にあわせて刻歯したのちに両面を分割する」など 形態をもつ木簡は帳簿で、 (写真2)。資料を実見しながら、楬や検などの用途にも 真ん中で分割しているが完全



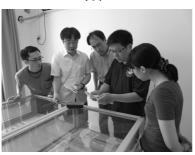


写真2

報告に移ろう。 実見したのは十一点で、編号は以下の通

号古井

(A)より出土した一四○点の木簡である。

V 63 · 118

69 (綴合)

V 68

123

V V V 139119 90 (綴合)

はそれぞれの形に応じてくり抜かれた透明な板に挟んで とを示し、 下部中央に手書きで編号が記されていた。 冒頭のローマ数字Vは 「呉簡」の略号。

編号が並記されているのは複数の残簡の綴合であるこ

はじめに張先生の 説明を踏まえて概要をまとめてお

漢代から宋元時期までの十一座の古井戸のうちの四

する湖南省郴州市蘇仙橋

建設工地で発見された、

郴州呉簡は、二○○三年に長沙市南四○○㎞に位置

れている。 とから、 もしくは削衣で、一部に焼け焦げた簡もみられるこ 書信・記事・習字などで構成されるが大部分は残簡 から、年代は三世紀前半と推定され、内容は簿籍 から赤烏六年(二四三)までの範囲に限られること 簡文に見える紀年は呉の孫権の赤烏二年(二三九 いる(今回実見した中の三点の綴合も含まれる)。 九年)には、段国慶氏による八点の綴合が示されて 橋遺址発掘簡報」(『湖南考古輯刊』第八集、二〇〇 南省文物考古研究所・郴州市文物処「湖南郴州蘇仙 第七輯、 処「湖南郴州蘇仙橋 14三国呉簡」(『出土文献研究』 釈文は、すでに湖南省文物考古研究所・郴州市文物 枚余も出土している。この郴州呉簡の全ての図版と なお同地の一〇号古井(Jl) 二〇〇五年)に公表済みであり、さらに湖 不用の残簡を井戸に廃棄したものと推測 からは西晋木簡九四〇

馬楼三国呉簡は、 される。 の面からも、 況をうかがう上での貴重な資料であるが、 これらは言うまでもなく呉の孫権時期における社会状 一九九六年に湖南省長沙走馬楼から出土した走 生成期の楷書の実態を示す資料として重視 およそ十万点という豊富な資料を提供 同時に書法史

V-84の冒頭の「書」字の横画に三節構造が認められ、 さらに進展することとなった。 もつ文字が含まれており、 とが実証された点である。そして走馬楼三国呉簡とほぼ 明瞭に認められ、楷書の発生時期が三世紀前半に溯るこ になってきている。中でも特記されるのは木簡の文字の 生成期の楷書の息づかいを詳細に観察することができた 同時期の資料であるこの郴州呉簡にも明瞭な三節構造を (写真3)。 部に楷書の特色である起筆―送筆 三世紀前半の筆記文字の実態がかなり詳細に明らか 当時の筆記文字の実態把握が 今回実見した木簡では、 ―収筆の三節構造が

写真3



は、前掲 れている二〇〇四年出土の東牌楼東漢簡牘に加え、 図版が収録されているが、 なお一○号古井 「湖南郴州蘇仙橋遺址発掘簡報」に五十一簡の 東漢簡牘 J10 については、 から出 全容はなお未公表のようであ 土した西晋木簡につい すでに報告書が刊行さ 7

> 代から三国時期を経て晋代に至る筆記文字の実態を、 新たに長沙市内の地下鉄 るご教示に対し、あらためて深甚なる謝意を表したい。 に張春龍先生をはじめとする同研究所のご高配と懇切な 体変遷の過程がさらに具体的に解明されるであろう。 量の同時代資料によって把握することが可能となり、 整理が進行中である。これらの資料が公表され 以上が湖南省文物考古研究所訪問の概要である。最後 一万枚に上る東漢期の紀年をもつ簡牘が出土し、 「五一広場駅」の工事現場から れば、 現在 漢

約

福田哲之